

ヤマトタケル伝承をめぐる

——「古事記の文学性」の周辺——

山 崎 正 之

古事記と日本書紀と、それぞれの性格を端的に示す素材の一つがヤマトタケル伝承であろう。もとより両書の成立について、ほぼ同じ政治的指導原理が働いていることは縷説するまでもない。それらを前提としたうえで、別ないい方をすれば、どのような路線を、古事記が日本書紀が志向したのであるうか、という意味である。

古事記中巻の景行天皇条（以下、景行記とする）は、各天皇記のなかでもはなはだ異色だといえよう。景行天皇事蹟の記事そのものとしては、后妃皇子女の記録のほかに、三野国造の祖・大根王の女、兄比売と弟比売を喚上げる話と小碓命（ヤマトタケル）西征・東征の命令、そして最終部の崩御年齢・御陵と、まことにわずかなもの過ぎず、それに数倍する伝承のすべてがヤマトタケルをめぐる内容なのである。

そうした景行記に比べると、日本書紀巻第七の景行天皇条（以下、景行紀とする）の場合、特に他の天皇紀とその構成内容において異なるところはみられない。ただ小碓命（景行紀では、小碓尊）についての記述に、兄の大碓皇子と「一日に同じ胞にして雙に生れませり。天皇異びたまひて、則ち碓に誥びたまひき。故因りて、そのふたばしらの王を号けて、大碓・小碓と曰ふ」といい、また亦の名に日本武尊をあげ（景行紀では亦の名に入っていない）、更に「若くして雄略しき氣有します。壮に及びて容貌魁偉し。身長一丈、力能く鼎を扛げまたふ」との言辞を加えている。

およそ天皇以外の存在にこれほどの記事を載せているのは、ほとんど異例といえるであろう。前者の雙生児も日本書紀で唯一の記録なのであって、そのことはそのま

まいわゆる「完形昔話」の英雄の異常誕生にも比すべき有様を伝えるものだ。また後者の記述は、半数以上の天皇紀の冒頭でその天皇をトータルにとらえて称讃する「聖徳」の言葉と等しく、このことだけでもヤマトタケルの他に抜きんできた偉容を十分にうかがわせるであろう。

そしておそらく、如上のヤマトタケルに並ぶケースとしては、推古女帝の摂政・聖徳太子を見るのみであろう。すなわち日本書紀卷第二十二・推古天皇条の元年夏四月の記事中に、「生れましながら能く言ふ。聖の智有り。壮に及びて、一に十人の訴を聞きたまひて、失ちたまはずして能く辨へたまふ。兼ねて未然を知るしめす」とあり、その直前に厩戸誕生（異常誕生に通じよう）について記すことといい、日本書紀におけるこの両者のきわめて相似た形象化は注目しておきたい。

景行記のヤマトタケル伝承は、明らかに二部構成に仕立てられており、その前半、後半の二部によって彼の生涯をあらわしたものとなっている。前半の西征と後半の東征と、ヤマトタケルの孤獨な戦いの足跡は、天皇の命令による皇権伸張という公的な名分に従った行程であった。が、その後半の結末において荒ぶる神との対決に敗れ死んで行く経過には、所期の目的を完遂できなかった

にもかかわらず、かえってそれゆえに悲劇の英雄への確固たる位置を得る状況があった、としなければなるまい。

西征は、いうならばヤマトタケル誕生の前史とみるべきものだろう。「吾は纏向の日代宮に坐しまして、大八島国知らしめす、大帯日子淤斯呂和氣天皇の御子、名は倭男具那王」と、西征の相手であるクマソタケルに名のつた名ゆゑには、姨ヤマトヒメから受けた衣裳による女装を超えて、彼のもっとも公的な威光を誇示しようとした主張がある（そこでのヤマトヲグナ——景行紀では日本童男——をめぐり、種々問題の存することは承知しているが、いまは触れないでおく）。

景行記の系譜で三太子の一人というヲウスが、激甚な強暴さ（兄オホウス殺しはそうみるしかないだろう）のために疎まれた経緯はあったにせよ、クマソタケルを討つ行動が、景行紀で知られるように皇権をかけた天皇自らのものである以上、ヲウスは天皇の代行者として終始したことは明白であろう。東征も含めて、彼には孤高な戦士というイメージが強く、その上に皇権をかさねあわせると、いわれているごとく宋書倭国伝の「昔より祖禰躬ら甲冑を擐き、山川を跋渉し、寧処に違あらず」を思いおこさせるし、また同様に神武東征伝承におけるカムヤマ

トイハレビコ（即位して神武天皇）の姿でもあろう。

クマソタケル兄を刺し殺し、瀕死の弟から「倭建御子」と称されたことで、ヲウスは西征の目的を達成、ここにヤマトタケルが誕生した——「然して還り上ります時、山の神、河の神、また穴戸の神を、皆言向け和して参上りたまひき」とは、京師への帰還、しかもそれは上首尾に果たし終えての凱旋將軍といつてよい。景行紀にも「天皇、是に、日本武の功を美めたまひて異に愛みたまふ」（二十八春二月条）と記しており、西征の完了を伝える。

ところが、景行記では周知の通りこれに続けて更に出雲に赴かせ、イツモタケルを討ったのち「参上りて覆奏したまひき」という。景行記ではヤマトタケルの最初の行動として、イツモタケル征討を西征つまり前半部に加えたことになる。加えたといつたのは、彼が受けた勅命に出雲行の件はなかったからだ。そうすると、この話は単独にヤマトタケルの出雲行を語った内容とみられるが、イツモタケルを倒すことがイコール出雲を制する意味を持つとすれば、この西征行の場で果たしたヤマトタケルの役割はまことに大きなものであったといわなければなるまい。

記紀神話においてはもとより、天皇記紀に入っても皇

権の側からみた出雲の位置は微妙である。それは国譲り神話以来、出雲には被征服者側という状況がついてまわっていることに関わっている。神武記での、出雲系であるオホモノヌシの女イスケヨリヒメとの結婚は、初代天皇の皇后であることから、多分に政治的な意図が見えて来るのも当然かと思われる。崇神記ではこのオホモノヌシがたたり、疫病を流行させて大量に人民を死に至らしめる。また垂仁記では出雲大神のたたりが、皇子ホムチワケ王の上にあらわれ物が言えなかつたと伝える。そして景行記の本伝承でヤマトタケルがイツモタケルを標的にしたことには、やはり出雲を制する行動に皇権側の強力な主張を認めてよいであろう。

イツモタケルを討った過程は、知られている如く崇神紀六十年七月条に記された、出雲臣遠祖の出雲振根とその弟飯入根との、出雲神宝をめぐる抗争の事態とまったく同巧である——この場合も、天皇に神宝を献上した弟を兄が殺す（その方法に例の木刀すりかえが用いられた）、そこに皇権に従順ならざる出雲の様相の一面が写し出されている。

クマソタケルの宴席に女装することでまず入り込んだ段取りと、イツモタケルと友人になり相手に近づいてだてとは、いわば搦め手からの作略だったのであろうが、そ

れらはまた強暴な武力一方ではないヤマトタケルを示すものでもある。

前半構成としては二戦のみであるが、この勝利への道程が後半（東征）との関連を保ちつつ、一つの伝承上の話型に拠っていると考える。西征伝承自体はハッピーエンド（幸福な結末）で完結した作品なのであり、それは神話伝承以来の話型を受け枠組みとしたものだった。主人公である神の動向、その軸になるのは本貫の地を離れた生活が様々に展開され、そうした状況の終局は事態を克服した主人公の幸福——勝者として政治的王者に上りつめる、という。

出雲神話では、オホナムヂが執拗な兄神たちの迫害を逃れてスサノヲの治める根の堅州国に赴き、そこでの諸々の体験をへて再び顕し世に戻り兄神を排して王者となった。日向神話で、ホヨリ（山幸彦）は兄ホデリ（海幸彦）の鉤針を失くしたことから、海神国で三年を過ごす話にしても、帰って兄を制するのだ。ホデリが「隼人阿多君の祖」（神代記）とあるのは、隼人族の服属を語る皇権側に立っているホヨリを意味し、神武天皇の祖父という直系なのである。

これらには、折口信夫のいわゆる「貴種流離譚」に連なる構成要素の存することは明らかだろう。折口信夫

は、神もしくは神に準ずる存在（皇族・貴族）の流離に「身にしめるような哀れ」を覚え、それを「文学における悲しみの発見」（「上代の日本人」）とした。ここで伝承の話型といったのは、先にも触れたごく流離の過程を枠組みととらえ、更にストーリーの結末（結着）をつけるところにある。記紀の伝承の主軸は、神話を含めて政治的要請にもとづく編纂意図が明白なだけに、その路線に沿った結末に導かれるのはいうまでもあるまい。

神武東征伝承は、初代天皇成立のために是非とも成功させなければならぬ使命を負って、高千穂宮を出発したカムヤマトイハレビコの行程を語ったものだ。橿原宮で即位するまでを一つのまとまった内容としており、再三にわたる危難を克服した経緯が如上の話型によっていられると思われる。オホナムヂと根の堅州国、ホヨリと海神国、それらは彼らがそれぞれに課された苦難を受けて訪れた他界であるが、カムヤマトイハレビコの場合、すでに人代という設定であれば、前二者のような他界を持ち込むことは出来ない話だろう。トミのナガスネヒコに敗れ長兄イツセを喪って、イハレビコは捲土重来を期し紀伊半島の南端海上を東に廻り熊野に入った。この熊野こそがまさに他界の位置にあるもの、といつてよいと考える。熊野・吉野をそのように見ることで、他界体験は地

元のタカクラジを間に高天原の神々そして靈劍・八咫鳥の顯現という形で具体化された。それから後は連戦連勝し、王者（初代天皇）への道をひた走るのである。

ヤマトタケル西征伝承にあつては、もはや世界觀想は遠いものとなった。その点だけでいえば、後半の東征伝承の方に荒ぶる神々との対決がみられ、西側とは非常に対照的な状況が設けられているのは興味深い。

西征においてクマソの国、出雲へ赴く行動が、ユウスをヤマトタケルたらしめる遍歴であり「流離」であつた、と理解できよう。ただし、他界觀想の喪失に代わる現実的な遍歴の克服を、單純に彼の並外れた臂力のみに戻しては片手落ちだろう。東征の場合も同様、姨ヤマトヒメとの結びつきをもう一つの古代性として認めておく必要があると思われる。

景行記では、出雲を制することで景行紀よりもスケールを持ち、それだけ凱旋の重味もあろうというものだ。幸福な結末は、ここに西征行の完全勝利をもってヤマトタケルの英雄像を決定的なものとした。

景行記は追いかけるように、ヤマトタケルに対し東征の勅命を記す——「東の方十二道の荒ぶる神、また伏はぬ人等を言向け和平せ」。西征がクマソタケル二人という指定によつた行動と、今回はかなり趣きを異にす

る。東の方十二道という広範な区域もさることながら、西征にはなかつた「荒ぶる神」の登場が、いかに東征の新事態なるかを示したものとみられよう。

もつともその点で、景行紀の西征の帰途に「吉備に到りて穴海を渡る。其の処に悪ぶる神有り。則ち殺しつ。亦難波に至る比に、柏濟の悪ぶる神を殺しつ」と記すのは、そこでも荒ぶる神を制していたことは明らかだ。しかし上にいつた景行記同様、あくまでもそれらは西征行そのものからは傍系の事態、つまり当初からの征討対象ではなかつたというしかないだろう。

東征の冒頭、ヤマトタケルが伊勢の大御神宮に参り姨ヤマトヒメに愁訴する場面は、西征との連関とともに西征にはみえない伊勢の位相の、東征に対する意味を持つ一方で、彼個人の死地にむかわせられる私的な思いが吐露されており、はなはだ暗示的である。彼の言葉のなかに「東の方十二道の悪しき人等」があつても、「荒ぶる神」のないことは討つべきものに格差をつけていたのであつたか。西征の場合がそうであつたように、「荒ぶる神」討伐には満腔の自信を得ているがゆえの無視だったのであるか。

東征伝承はヤマトタケルの敗死で終わる、悲劇的結末の話型である。前半（西征）をふまえながら、東征は東

征で完結した二部構成をなしている。その第一部は尾張国造の祖ミヤズヒメとの結婚譚で、西征が「御髪を額に結」った少年ということを考えれば、西征勝利を背景に東征当初に結婚をめぐる動向が出て不自然ではない。ミヤズヒメと「婚ひせむと思ほししかども、また還り上らむ時に婚ひせむと思ほして、期り定めて東の国に」出発するヤマトタケル、そして約束通り二人が再び出会うまでに、実に様々な曲折があった。相武国造の焼打ちには娘ヤマトヒメより受けた品（草薙劔と御囊）に助けられ、走水の海の渡の神（荒ぶる神）には后オトタチバナヒメの入水に助けられ、足柄山の坂の神を誦で打ち殺し、甲斐の酒折宮で御火焼の老人と歌を和し、科野国を経て尾張にもどるのだ。

二人の再会は当然結婚に結びつくわけであるが、出会いから結婚に到る間の曲折という設定は景行紀になく、これもまた景行記での編纂意図からのものである。東征事業の過程がそのまま結婚への試練ともいえる入れ籠型であり、そうした構成の奥行きは曲折・試練の振幅の大きさによって、更にヤマトタケル像の陰翳を深めている。従ってヤマトタケルとミヤズヒメの結婚は、そこで幸福な結末を迎える形通りの話型といえ、同時に、后オトタチバナヒメを喪う犠牲を蒙りながらも東征行は順調

な成果を挙げて行くのである。

そこで結着としての二人の結婚をめぐる語りされている内容につき、少し検討を加えたい。「——ここに大御食献りし時、その美夜受比売、大御酒盞を捧げて献りき。ここに美夜受比売、それ襲の欄に、月経著きたりき」という。このミヤズヒメの状況は、やはり特殊なケースになるもので、通常の婚姻とは一緒にならない。二人の唱う歌謡からも、その特異性はうかがえる。月経中のミヤズヒメの大御食・大御酒盞を受け、かつ結婚するという次第は、神が巫女と交わす一夜婚に擬せられるであろう。

東征伝承の第一部は、ヤマトタケルの聖婚をピークに大団円を迎えたことになる。そして東征継続の第二部が直ちに開始される——「その御刀の草薙劔を、その御夜受比売の許に置いて、伊吹の山の神を取りに」赴いたのだが、そのときのヤマトタケルの言葉「この山の神は、徒手に直に取りてむ」を、どのように理解したらよいのだろうか。草薙劔を置いて出たことが徒手というわけである。荒ぶる神に対し素手で立ちむかう決意のもと、彼の十全に充ちた自信とみるほかはないと思われる。人代における聖婚を達成し、それによってヤマトタケルの英雄像はこれまでの様々な古代性（呪的性向）を伴った

武力・智力と重ねて、完成した。自信はここから来るものと読めるであろう。

第二部で伊吹の山の神の正身を見破れず、英雄ヤマトタケルは敗れ去って行く。景行記は栄光の座から急転して、彼の死への行程を克明に追いながら、すでにまったく英雄的な資質を何一つ持たない男の望郷の思いに、残りのすべてを集約させるのだ。その間、居齋の清水——当芸——杖衝坂——三重と、ヤマトタケルの名称は一回も登場しないまま、病いに堪えて彷徨した跡を記述は地名起源説話としている。東征のなかでも末期状況とすべきところで、集中してあらわれて来るのにはそれだけの理由があるのだろう。

三重から能煩野に出たとき、「国思ひ歌」が歌われた。景行記をみても知られるごとく、これらの歌をヤマトタケルの死の直前に歌わせたのは、景行記のヤマトタケル伝承の編者であったことは明らかだ。東征出発時の嬢ヤマトヒメへの愁訴と、それはおそらく運動する効果を承知していたに違いない。

ヤマトタケルの死は、死後の「ここに倭に坐す 后等また御子等、諸下り到りて、御陵を作」った経緯をみれば、東征事業の場から離れて私的様相の中にあるといつてよい。天皇の慟哭と「今より以後、誰人と興にか鴻

業を経綸めむ」との発言、臣下に命じ百寮に御陵を作らせ葬ったと伝える景行紀とのあいだには、きわだって対照的なヤマトタケル像が存在した。更に加えると、彼の陵墓から白鳥の飛び去る話は死後なお彼に對する人々の思慕の消えやらぬあかしともいえるが、景行紀では墓を開いてみると屍骨が無くなっていたとし、外来の神仙思想による聖人化が景行記とはおよそ傾向の異なるイメージを作りあげる。日本書紀ではもう一人、本稿の初めに記した聖徳太子がやはりそのすぐれた資質を、同じように神仙思想で美化していることは知られている。この二人の、日本書紀における多くの相似性には、なお検討されてよい課題があるはずだと考える。

景行記の東征伝承はその第一部と第二部とで、ミヤズヒメと結婚の幸福から荒ぶる神との戦いに敗れ死んで行く、悲劇的結果をもってヤマトタケルの半生を描いた。そこに前半の西征伝承を接ぎあわせ、みごとに英雄の生涯が出来あがる。それは明確な構想のもとに組み立てられた作品、といえないであろうか。西征と東征と、それぞれに既成の話を下敷にしながら、しかも伏線を備えた両者の連係が認められ、不世出な英雄の敗者への転落そして孤独な死。この伝承には、一人の人間の生涯をたどるといふ軸があった。単なる事蹟・挿話の羅列ではな

い、それどころかそこには上述のごとき一貫した構想にもとづく、人間形象が志向されていたと思われる。

いささか粗っぽいことを敢ていうならば、垂仁記のサホビコ・サホビメ伝承・仁徳記のメトリの女王とハヤブサワケの皇子伝承そして允恭記のカルの太子とソトホシの郎女伝承など、皇位をめぐる危機的状况を正面にすえながら、それぞれに男と女の私情が切迫した場面のなかに見え隠れし、読者の感動を誘う。そのうえ、事態の結着はいずれも二人の死によってつけられているので、これらもまた敗者としての悲劇的末路をたどったものと思われるであらう。

古事記の文学性の究明には、それなりに多様な視座が用意されなければならないのだが、人間の私情の、悲劇的結末に収束されて行く過程に、一類型を見出したいと考える。